沖縄では

日本で唯一地上戦に巻き込まれた沖縄の人たちは、米軍の攻撃に痛めつけられただけでなく、守ってくれるはずの日本軍からも一部でひどい目にあわされていた。

壕の中で敵の捜索から逃れるために、息をひそめていたとき、子どもが突然かん高い声で泣いた。４，５歳の男の子だった。兵隊は、「敵が外にいるぞ。殺してしまえ。」

写真で語る 沖縄の戦い
森山康平 著
河出書房 発行

渡嘉敷島では、守備軍の隊長の命令で、住民３００人以上が集団自決させられている。

壕の中で、終戦も知らず、生米をかじりながら４２日間も岩床に座って孤独感に耐えていた女性もいた。

自分の体験と映画撮影を通して知った戦争の怖さを綴った作品
香川 京子 著
朝日新聞社 発行

犠牲になるのは若い人たち

「ひめゆりたちの祈り」の著者香川京子氏は、作品の中で語る。

> 戦争でいちばん大きな犠牲を強いられるのは、いつも若い人たちです。時の権力者や指導者は、自分たちは安全な場所から、若い人たちに「やれ、やれ」と号令をかけて、死地に追いやっている面があるわけです。
>
> 若い人たちが戦争でどんなに多くの犠牲を払うかは、沖縄戦の結果をみれば、はっきりしています。

沖縄戦での戦没者数

【日本側】
- 軍人、軍属９万４千人
- 戦闘に参加した住民　５万５千人
- 一般住民　３万９千人

計　約１９万人

（沖縄県生活福祉部援護課の調べ）

【米軍側】
- 軍人　１万２千５百人

【沖縄１３歳から１９歳】
- 男子生徒　２千人余りのうち　約１千人　戦死
- 女子生徒　約５９０人のうち　３３０人以上戦死

「ひめゆりたちの祈り」より

子どもたちの友情の人形

豊橋に２体　今も残る「青い目の人形」

青い目の人形
武田英子 編
山口書店 発行

昭和２年、アメリカから、約１万２千体もの日米親善「青い目の人形」が贈られた。それは、各都道府県に配布され、町村の小学校・幼稚園に分配された。当時は、「アメリカの人たちが、友情や愛を込めて贈ってくれた人形」だということで、大喜びで人形を迎え、大切に保管された。

しかし、今では、２００体あまりしか残っていない。戦時中、「にっくき敵国の人形」ということで、焼却されたり、壊されたりしたからである。当時、ある学校で児童にアンケートをとったところ、

①破　　壊	89 名
②焼いてしまえ	133 名
③送り返せ	44 名
④目のつく所へ置きいじめる	31 名
⑤海へ捨てろ	33 名
⑥白旗を肩にかけて飾る	5 名
⑦米国のスパイと思って注意	1 名

という結果になったという。このことから、児童の心にも、戦時下日本の観念が、浸透していることがよく分かる。

あやと青い目の人形
松永照正 著
クリエイティブ２ 発行

一方で、人形を必死で守ろうとした人たちもいた。

豊橋には、今でも西郷小学校と細谷小学校に残っていて、大切に保管されている。子どもたちは、愛を込めて贈ってくれたアメリカの人々の心と、壊さずにそっと隠してくれた、戦争中の学校職員の思いを、しっかり引き継いでいる。

『青い目の人形、ただいま８７歳』

右：エセル・ディーン（細谷小学校所蔵）
左：コネタ（西郷小学校所蔵）